

---

# 片想いの切なさ

ホワイトピンク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

片想いの切なさ

### 【コード】

N0165L

### 【作者名】

ホワイトピンク

### 【あらすじ】

主人公梨花の切ない片想いを描いた純情ラブストーリー。

私自身中学生なので、気持ちをすごく共感させながら書きました。多分読みやすいと思います。

## 新しい恋

雨に濡れた校庭を眺めながら、私は想った。

小学校時代の初恋ははかない。

簡単に散ってしまう。

卒業という運命に潰されて、

簡単に折れる。でもまた元に戻る力など、まだない。

まだ子供が故に、なにもできない。

自分の無力さを感じる。

私には、小学校5年生の時から、ずっと好きだった男の子がいた。

その男の子には、6年生の修学旅行の時に淡いラブレターを渡した。

今思えばすごいことをしたと感心する。

その時は勢いだった。それほどまでに好きだった。大好きだった。

返事は、「僕も好きです」と書かれたノートの切れ端。

嬉しかった。

胸がきゅゅんと締め付けられて、私はその時涙がでてきた。

ずっと一緒だよ。

約束した。

彼の名は、潤。

少し背が高く、いつも身長が一番前だった私はいつも少し見上げて話していた。

成績は、いつも私と競い合っていた。

運動神経抜群で、走る姿がすごく芸術的。

すごく話しやすく、楽しい人。

それが、潤だ。

それが、潤だ。

しかしある日、当たり前のように潤と同じ中学校に行く予定だった私に、おかあさんは軽々と言った。

「梨花。第一中学校の制服買いに行こう。」

第一中学校？潤と私が行くのは第二中学校のはずだ。

「おかあさん、間違ってるよ。」

おかあさんはきょんとした顔で私を見つめた。

そして、私は最悪なことを聞いてしまった。

私が住んでいる家の地域は、ぎりぎり第一中学校の学区だと言つてと。

私は学年でただ一人第二小学校から第一中学校へ行く人間だということ。

当然潤とも違う学校だということ。

私は頭が真っ白になった。

卒業式。

携帯を持っていない潤とは、もう永遠に会えなくなるかもしれない。連絡手段は手紙と電話しかない。

でも私たちはお互いに電話番号も住所も知らなかった。聞けなかった。

「梨花、俺、お前のことずっと好きだから。」

いつの間にか、潤の一人称は「俺」になっていた。

「私も　好きだよ。」

潤は私の髪を優しくなで、笑った。

「俺のこと忘れたらぶっ殺すぞ。」

「へへっ。大丈夫。絶対　絶対ずっと好きだから」

「約束、な。」

私たちはそつと小指を絡ませて、卒業した。

大好きだった潤とは、それ以降1年以上会っていない。

私は視線を黒板に戻す。

すると思わずため息が出る。

この一年間、私はこの学校に慣れるのに必死だった。

第一中学校は、第一小学校の卒業生がほとんどで、第二小学校の卒業生である私は浮いていた。

友達なんか、いない。

みんなグループを作って話していて、全くなじめなかった。

でも今はたくさん友達はできた。

何一つ生活に不自由はない。

ただ、潤がいない。

私は1年経った今でもまだ潤のことが忘れられなかった。

やっぱり思い出してしまう。

好きだと思う。

まだ、潤のことが好きだとおもう。

でも潤はもう私のことなどなんとも思っていないようだ。

昨日の友達からのメール。

『梨花くお久！

潤っていたじゃん？

あの梨花と付き合ってた。

覚えてる？

その潤が、テニスの大会で会った他校の子と付き合うことになっ

たらしいよ！

めちゃくちゃ可愛い子だって』

私はその日初めて潤を想って泣いた。

今まで耐えてきた全ての苦しみが襲いかかってきた。

ずっと泣いていた。

昨日の友達からのメールは、もう覚えるほど読んだ。

付き合ってた。そうか。私と潤はもう別れていたのか。

そんなことも知らずに私は、また会えるかもしれないなんて思いな

がら、潤が行きそうな高校を目指して頑張っちゃったりして。

我ながら、馬鹿だよな。と思う。

ヤバイ。また涙がでてきた。

私は授業中なのにも関わらず、声を殺して静かに涙を流していた。休み時間、同じ班の男子に話しかけられた。

「梨花、大丈夫？」

「平気。」

「そ。」

冷たいやつだな。

私はそう思った。

潤なら　潤ならもっと優しい言葉をかけてくれたのかな。でももう潤はいない。

私の中の世界には、もういない。

そう思うと、潤なんて人は最初からいなかったような気がしてきて。そして1年という気が遠くなるような長い時間に圧倒された。

そうか。あれからもうすぐ1年だな。

2009年1月はもう終わろうとしていた。

給食は、4人で机を合わせて食べる。

しかし私の班には男子2人と女子1人しかいなかった。

私の他にもう一人いるはずの女子は、現在不登校だ。

さっき話しかけてきた男子が、カレーとご飯を器用にスプーンにのせながら言ってきた。

拓海という名前だ。

「梨花。さっき泣いてたの、どうしたの？」

すると隣に座る男子が慌てて言う。

「あんま聞かない方が良くないんじゃないの？」

そのとおりだ。

「え　あ、ごめん。」

そうとっさにあやまる拓海。

私は素直に謝られて逆にちょっと恥ずかしくなった。

「いや、別にダイジョウブ。ちょっと昨日見た本が感動しちゃって

」

我ながら嘘は苦手だ。

「えっ？なんの本？」

しかし、拓海は私の『本』という言葉に過剰に反応する。

「教えてよお」

私は今テキストに読んでる本のタイトルを言った。

「！？マジ？やべえ。俺もそれ読んで。ほら。」

そういつて机から私と全く同じ本をとりだす拓海。

今思えば、この瞬間に私は拓海に惚れたのだと思う。  
でもそのときは全く予期していなかった。

「わぁーマジで？その本超泣くよね！」

私はすこし ほんの少し嬉しくなつて拓海を見た。

すると拓海は整った顔を少し崩して笑った。

「別に泣かないけどな。でも面白い本だと思うよ。お前も読む？」

そういつて拓海は隣の席の男子に薦めた。

「俺は遠慮しとく。分厚い本みると吐き気がする」

玉木はこの班で一番勉強が苦手だ。

といつても、私も拓海もいつも学年トップ10には入ってるこのクラスの平均点をあげるストライカーだから、玉木もそんなに悪い点というわけではないだろう。

「俺のこの前の国語のテスト、何点だと思う？」

玉木はニヤニヤしながら言ってきた。

「90点？」「95点？」

私と拓海は当てずっぽに言ってみる。

「残念！2点でした」

前言撤回。

玉木はアル意味学年で10位に入っている1ケタ大王だった。

今まで全く他の男子のことには興味が無かった。

でも、同じ班の男子だけでもこんないろんな発見があるなんて。

潤を想っていた1年間が無駄におもえてならない。  
もっと楽しく過ごせたかも。  
もっと笑って過ごせたかも。  
そう思うと後悔しか残らない。  
よし、潤のことは忘れよう。  
そう決心したその日が、

私の拓海への恋が始まった瞬間だった。

## 新しい恋（後書き）

ここからものがたりはスタートします。

私（梨花）はここから、拓海にベタ惚れするわけで。

あ、これ以上言ったらネタバレですね。

ええと　はい。

次も絶対読んで下さいね！

## 幸せな時間

給食時間。

食事をとるといふ動作が好きじゃない私は、箸をかちやかちや遊びながらスープをかき混ぜていた。すると向かいに座る玉木が言う。

「おい梨花。ちゃんと食べよ。部活持たないぞ。」

玉木はサッカー部、拓海はバスケット部。それぞれハードな部活に入っている。

「ええ〜だつてお腹減つてないし」

それに茶道部に入っている私はどうせ放課後お菓子を食べることができる。

「そのスープ、美味しいよ。食べなよ。」

拓海が言った。

でも気が進まない。

「だつて　グリーンピースが」

私は器用にグリーンピースを3個箸でつまんだ。

「おお。すげえ。」

男子2人が感嘆の声を漏らす。

すこし優越感を感じて、次は4個つまんでみた。

「梨花。やるな」

2人ともスイツチが入ったらしく、それからしばらくはグリーンピースで遊んでいた。

「えっ。お前スゴクねっ？俺全然できないんだけど。」

「さすが茶道部。」

「いや、関係ないし。」

キーンコーン　チャイムの音だ。

「ごちそうさまっ！」

「え、もう給食終わり?!」

それを良いことに、私はトレーを持ってほとんど残した給食を片付け始めた。

「おい。梨花！せめてりんごだけでも食べよ！」

拓海が叫ぶ。

それがことの始まりだった。

「ええ〜オナカいっぱい・・・それにほら！一口食べたよ！」

私はニツと笑ってほんの少し齧った部分を見せる。

「テメー！りんごを粗末にするなあ！」

そういつて拓海は後ろから私の首をぎゅーっと締め付けた。

「ぐぎやあああ」

私は変な声をあげ、目を大きく見開いて拓海をみる。

ドキドキと心臓が音を立てている。

すると拓海は動揺してるわけでもなく、謝る気配もなく、「思い知ったか」と笑って去って行った。

私はあんなこと男子にされるのは初めてだったからなのか、しばらく高鳴る胸の鼓動。

動揺して私は思わずりんごを床に落としてしまった。

ドキドキする。手が震える。

そしてその日は放課後まで拓海のことを見れなかった。

惚れちゃったか。

私は布団の中で思う。

真つ暗の中での考え事は意外と楽しい。

毎晩いろんなことを考える。

今日はもちろん拓海のことだ。

思えば潤のことを忘れようと決めてから1ヶ月間、

私はずっと拓海のことを考えていたような、いなかったような。

拓海好きだ！。

って何考えてるのよ、私。

ありえない。ありえない。

好きじゃないから！

でも好きだなあ。

あの白い肌。細いけどビックリすると大きい目。

透き通るような声。

白くて細くて程よい筋肉がついた足。

細いけど男っぽい指。

そう思った瞬間、私は今日拓海に締められた自分の首をさすった。いきなりだったから変な声を出しちゃったけど、痛くはなかった。首を締めるというよりは首を触るような。

優しさを少し、感じる。

少し顔が赤くなる。

どうしたんだろ、私。

何考えてるんだろ、私。

だから好きじゃないんだって！

でも拓海は今日のこと、なんとも思っていないんだろうな。

男子にキックするくらいにしか思っていないんだろうな。

もう忘れてるんだろうな。

でも女子の心はそうはいかない。

忘れられない。男子に故意に首を締められて、忘れるはずがない。

拓海って妹いるんだっけ？

シスコンって噂だけ。

多分、妹にも家で同じようなことをしていて、たまたま学校でやってしまっただけなんだろうな。

私のこと好き　　とか　　ありえない　　よなあ　　。

今までの言動を見ている、拓海の私に対する態度は別の女子と全く同じだ。

そうだな。なんとも思っていないんだな。

って、だから拓海のごときは好きじゃない

でも1ヶ月前だったら絶対に考えないようなお願い事をして眠って

しまつ自分がいる。

拓海に好きになつてもらえますように



そう心から思えることって人生であとどれくらいあるのだろう。

私は思いをめぐらせていると、拓海が口を開いた。

「バランス、ねえ　　確かに。俺玉木も梨花も話してて楽しいからな。」

私は思考が停止した。

拓海にそんなこと言ってもらえるなんてこの上ない幸せだ。

女子として見てくれてるわけではないことなんて分かっている。でも単純に嬉しかった。

「私も、楽しいよ。」

満面の笑みで拓海を見る。

そんな私を玉木が複雑な顔で言った。

「なあ、梨花つて、拓海のこと好きなの？」

「な！」

私は幸せの絶頂から一転。いきなりの問題発言に慌てふためいた。

「そ、そんなわけないじゃん。」

「マジで？好きな人いないの？」

「だからなんでイキナリそういう系の話になるわけ」

「いや、別に。」

すると玉木は少し顔を赤くしてうつむいた。

そんな玉木を拓海が肘でつつく。

私はそれを見て、あっ　　と思った。

少し、ズキンと胸が痛んだ。

それを振り払うように大声で言う。

「ああゝ眠いなあゝ」

しかし玉木は私を無視して真面目な口調で言った。

「梨花のことが好きなんだけど。」

私はキター　　と内心思いつつも驚いた様子で目を開いた。

こういうことは初めてではない。

むしろ結構多い方だ。

中学に入ってから、私はなぜかやたらと告白されるようになった。

それは他のクラスの話ししたこと無い男子だったり、先輩だったり、クラスの男子だったり。

でも私はその全員を「好きな人がいるから」と断ってきた。実際そうだった。

私は潤が好きだったから。

でも今は違う。

今は拓海が好きだ。

潤ではない。玉木でもない。

「玉木　そんな風に言ってくれてありがとう。」

少し顔が紅潮してしまう自分が悔しい。

横から私と玉木を見ている拓海が悔しい。

そしてそんな拓海のことが大好きな自分が悔しい。

すると玉木が口を開いた。

「俺、梨花のことが好きだよ。だから、付き合ってください。」

顔を真っ赤にして言う玉木の横で、拓海は満足そうに笑う。

そんな拓海の様子に少し傷つきながらも、

「ごめん！玉木のご機嫌は好きだけど、でも　他にもっと好きな人

がいるから」

私はちらりと拓海を見て言った。

「そう。」

玉木は残念そうに、でも笑って言った。

「まあ、言えて良かったよ。だから、梨花もちゃんとその好きな人に伝えるよ。」

そう諦めたように、でも前向きに玉木はちゃんと私の目を見て言った。

この人は強い人だな、と思う。

多分、玉木は私の拓海に対する想いに気づいているのだと思う。

でもそれを知ってて、あえて今私に告白したのだと思う。

それも、拓海に相談して。

好きな人の好きな人である拓海に相談して。

それがどれだけ悲しく、虚しいことであるか私には想像がつかない。どれほどまでに玉木が傷ついているのか想像はつかない。

でも、私だって傷ついている。

拓海は私の想いに気づいていない。

というか、果たして拓海に「恋」という感情があるかどうかも不安だ。

でも、今日のことではつきりと、明確に、拓海は私のことは何とも思っていないということに気がついた。

応援するくらいなのだから。

玉木と応援するくらいなのだから、拓海は私のことは何とも思っていない。

拓海と付き合いたいななんて願望があるわけじゃないけれど、でも胸が痛い。

でも、私はそんな鈍感で女子の気持ちなんて全然分からない拓海が好きだ。

好きだよ。

涙がでるよ

「えっ。ちよつと梨花！泣くなよ！つてかなんでお前が泣くんだよ！」

玉木が慌てて言う。

拓海は「なんで?!」と言いながらハンカチを差し出す。

私はそんな拓海のさりげない優しさにますます涙がこぼれ落ちて、柔らかくていい香りがするハンカチに顔をうずめて泣いていた。

そして、心の中でずっと「拓海好きだよ、好きだよ」とハンカチに願いを込めていた。

## 最後の日

玉木はそれ以来、私に普通にいつも通り接してくれた。

そんな玉木の優しさに救われながら、今日も幸せな給食時間。他愛ない会話をしていたのもつかの間。

「梨花、お前本当馬鹿だよなあ。」

拓海がふいに言った。

「え？私なんかした？」

「玉木フるとかさあ。お前本当馬鹿だよ」

「！！！！馬鹿！拓海の方が馬鹿！」

私は小声で拓海を怒鳴った。空気読め！

拓海の横で、玉木が困ったように苦笑いをしている。

でも上手く笑えていない。

少し傷ついたように、でも拓海だから仕方が無い、というように、

玉木は笑っている。

「ふえ？」

拓海は私の言った言葉の意味が分からなかったようで、訳の分からないカワイイ声を出す。

「拓海って本当鈍感。」

そんな私の言葉に納得したのか、玉木もうんうんとうなずく。

「拓海は鈍感だよな。」

「へ？何が？！」

「いや、良いんだけどさあ」

玉木はまた黙ってしまった。

もう！拓海のせいで変な空気になっちゃったじゃないの。

本当、KY。あ、死語か。

でもそんなKYな拓海も好きだったり。

「あ、あのさ、もう忘れようか。最後の日だし。別の話しようぜ。」  
玉木が明るい声を出してくれたおかげで空気は救われた。

そう。今日は最後の日だ。

1年生最後の日。

このクラスも、この班も、最後だ。

拓海と玉木とは結構仲が良かったから、違うクラスになる確率が高い。

「最後だな」

拓海が名残惜しそうに教室を見渡した。

そんな姿を格好いいと思ってしまう。

でもこんなことも最後なんだな。

なんだか実感がない。

「最後、か」

私たちはしんみりとお互いの顔を見合わせた。

「2人とも好きだよ。」

私は2人に言った。

違う感情が含まれるとしても、私は玉木も拓海も大好きだった。

「俺も。梨花も拓海も大好きだ」

玉木も言う。

「玉木お前俺のこと好きだったのかよーホモじゃん。」

拓海がそんなくだらないことを言い、またコイツKYだわなんて思いながら、でもやっぱり好きなんだなと改めて思っていると、拓海も言った。

「俺も玉木のこと、好きだから安心しろ。あ、梨花も。」

「ちよつと。私付けたし?!」

「ごめんごめん。梨花、好きだよ。」

もちろん特別な感情なんて入っているはずがない。

そんなこと分かっているけど。

でも嬉しかった。

「ありがとう。」

私はそう言って拓海を見た。

拓海は顔を赤らめることもなく、ただ「おう」と言いながら私を見

た。

玉木は誰にも聞こえないように、「頑張れよ。」「とつぶやく。

そしてグリーンピースを3個箸でつまんだ。

## 学年の常識

今日から中学2年生だ。

私はウキウキして登校する。

新しい友達、できるかな？

そう思い軽い足取りで昇降口へと向かう。

昇降口には今年のクラスが書かれている。

ウキウキなんて、嘘。

本当はドキドキしている。

案の定、新しいクラスが書かれた紙の前にはたくさんの人が群がっていた。

背が低い私には全く見えない。

と、少し前のほうに拓海を見つけた。

春休みの間一度も拝めることのできなかつた拓海の姿に、私はすこく興奮する。

身長も、かなり伸びている。

1年生の最後と比べて、大人っぽくなった雰囲気、私の頬を更に火照らせる。

と、拓海が視線を感じたのか、キョロキョロと周りを見渡す。

可愛い！

私は身悶えしながらもぴよんぴよんと跳ねてクラス名簿を見た。

あつた！1組だ！

そして拓海も1組だった。

やった！

今年も同じクラスだ！！

私は嬉しさのあまりガッツポーズをした。

私は階段を駆け上がり、2年1組と記された教室に入る。

ほとんど、知らない顔。

ここでもまた女子はグループが作られていて、私は少し戸惑った。でも心配はいらなかった。

同じ茶道部の友達と話しているうちに、段々とクラスの女子の輪が広がってきた。

私は、学年の中では結構有名人だったらしく、みんな気軽に話しかけてくれた。

どうやったたらそんなにモテるの、なんて聞かれていた気がする。

そんな間も、私は思わず拓海の姿を探してしまう。

そういえば、玉木は違うクラスだった。

拓海は誰と話しているのだろう。

見ると、凜という名の背の高い男子と話していた。

凜と拓海は幼なじみらしい。

私はなぜか少し安心して、女子の会話に没頭した。

それから、私と拓海はひと言もかわすことなく生活していた。

同じ班で無い限り、話す話題もなければ必要もない。

私は少し寂しく、残念であったが、拓海の姿を見るだけで十分だった。

そんなある日体育の時間に拓海の走る姿を見てみると、

「ねえ、梨花つて拓海くんのこと好きでしょ？」

いきなり、果歩という私と結構気の合う友達が言ってきた。

「なんで？」

「毎日ガン見してるよね。チラ見どころか、ガン見。」

「えっ。嘘!？」

「本当。梨花と同じクラスになって3ヶ月、毎日思ってたよ。凶星?」

「まあ。」

隠す意味もなかったから正直に言った。

それがいけなかった。

次の日、それは学年全体に広まっていたのだ。

「よっ。拓海。」

男子は私にそうヒューと声を出しながらすれ違っ。

女子も、「梨花なら大丈夫！告白しなよっ」と私の肩を叩く。

それを私は無言で見つめ、そしてああ　と思う。

果歩を恨む資格はない。

口止めをした訳じゃなかったし、あそこで嘘をつくことだってできたはずだ。

でもしなかった私は、ひよっとしたら少し拓海にこの想いがバレて欲しいなんて思っちゃったりしてたのかもしれない。

だからといって進展があるとは限らないけれど、このままダラダラと過ごすのは少しイヤだと思った。

でもそれがさらに私を傷つける出来事へと繋がった。

私の好きな人が学年の常識となつてから、私の周りでは拓海の話でもちきりとなつていた。

ある日委員会の時に、一緒に学級委員をやっている男子が言った。

「なあ、拓海好きな人つて知ってる？」

その男子は、拓海の幼なじみである凜だった。

「え？誰？つてか、いるの？」

私は自分の顔が赤くなるのに気がつきながら、言った。

拓海は女子には興味はない、と言いつつ聞いていると聞いていた分、驚きが大きかった。

シヨックも大きかった。

「ねえ、誰よ。」

私は教室で私と凜の他に誰もいないのを良いことに大声を出して聞いた。

少し、胸が痛んでいた。

そして凜は言った。

「今拓海の隣の席の、千秋。」

千秋。

凜ははっきりとそう言った。

そうだったのか。

拓海の好きな人は、千秋。。。。

千秋は明るくて、声がでかくて面白い女子だ。

顔もまあまあ悪くない。

勉強は出来る方ではないけれど、そんな方が女の子らしくて可愛いのだろうか。

「それ、本当？」

私は震える声で聞いた。

「うん。多分だけど、拓海の初恋。」

私はそれからのことを覚えていない。

気がついたら、家で泣いていた。

## 失恋

分かってるよ。

私だって分かってる。

多分、拓海は千秋と付き合っただと、そう思う。

所詮私は片想い。

拓海を恨む資格も、千秋を妬む資格も、無い。

だけど悲しむ資格はあるよね。

私は授業中に楽しそうに千秋と話す拓海を見つめた。

絶対に睨んじゃいけないと自分を押さえつけながら、千秋のことも見つめた。

凛は次の日、私に手をついて謝った。

「悪い。なんかめっちゃ傷つくこと言っちゃったみたいで。ごめん。」

凛は悪くない。

馬鹿正直なだけだ。

だけど凛さえも憎んだ瞬間だってあった。

それ、普通私に言うか？

って、凛を憎んだ。

こんなに人を悲しませて

でも憎んだって、恨んだって、妬んだって、なにも変わらない。

そうよ。

ちやっちやと告白しなかった私が悪かったのよ。

このままで良いとかキレイこと言って。

姿を見てるだけで幸せとか。

確かに幸せだけど、でも 拓海が誰かのモノになるのなんて見てられない。

だったら見ない方がマシだ。

そして拓海の姿を見られなくなった私には、なにも残らない。

クソ

私はどうすればいいの？

片想いつて苦しい。

胸が痛い。

すごく、痛い。

あ　　また涙が。

授業中に泣いたのって、あの日以来かな。

そして、休み時間に、拓海に「大丈夫？」って心配されたんだよね。  
懐かしいな。

そう思うとますます涙はこぼれ落ちる。

あの時に戻りたい。

玉木と、拓海と私だった班に戻りたい。

あの、他愛ない会話をもう一度したい。

幸せ、だったんだな。あの時は。

涙が止まらない。

でもこの涙は、諦めの涙じゃないことは自分でも分かっている。

ただ悲しいから泣いているだけ。

私の前の方の席で、手紙を交換している千秋と拓海を見るのがつらい。

悲しい。

あの手紙が私に宛てたものなら、どれだけ嬉しいのだろうか。

涙が止まらない。

## 告白

私は、隣の席である凜のことを見た。

凜は私の視線に気づき、「えっ？」と驚いた声をあげた。

「ど、どうしたの？」

小声で言う凜。

国語の授業中で、みんなは古文の問題を解いている。

中学2年生も終盤にさしかかり、全員受験生への意識が高まっている。

かりかりと言うシャーペンの音だけが響く教室。

ちなみに私はもう終わったので、ノートの端にらくがきをしていた。

「なんだよ　あ、ちょっと待って。あと一問。」

そういつて凜はすばやくレ点を打った。

私はその様子をじーっとみつめる。

そして、小声で言った。

「凜、お願いがあるんだけど」

放課後。

私は教室で緊張で震える足を押さえていた。

これから、拓海が来る。

凜に、『理由は聞かずに拓海を放課後教室に連れてきて。』と頼んでおいた。

凜は基本優しい。全て分かったようにうなずいて微笑んだ。

理由は分かっているはずだ。

多分、迷惑だらうけど。

多分、困るだらうけど。

絶対、ダメだらうけど。

私は拓海に告白するのだ。

告白して、全てをぶつける。

ここまで決心するのに、私はどれだけ考えただろう。どれだけ悩んだだろう。

でも、もう後悔はしたくない。

ハッキリとさせたい。

伝えたい。

拓海と恋人になりたい。

恋人になって何をするか、とか、全然分からないけど。

でもこのままだとダメな気がする。

どうせ千秋のことが好きなんだろうけど。

でもダメで、もともと。

今なんとなく、玉木の気持ち少し分かった気がする。

あの時もう少し優しい言葉をかけてあげられればよかったな。

少し、後悔する。

でももう戻れない。

と、たったった という軽やかな足音が聞こえた。

バスケのユニフォームを着て、拓海は驚いた様子で立っている。

「梨花？」

私は震える声で言った。

「ねえ、拓海、知ってると思うけど、私拓海のこと好きだよ。」

単刀直入に言った。

拓海が消えちゃいそうな気がしたから。

消えないうちに、言った。

すると拓海は冷たい声で　ぞくつとするほど冷たい声で言った。

「知ってる。」

私は怖くなって、胸が痛くなって、鳥肌が立った。

「ごめん」

私はなんとなく謝った。

うつむく私。

終った。

私はたくさんの男子にモテることより、一人の大好きな人に好きに

なってもらうことのほうがずっと難しいと思った。

拓海は言う。

「なんで謝るんだよ。」

そう言っただけで黙ってしまった。

私は次に何て言うかなんて決めていなかったから、私は拓海から目をそらして、沈黙していた。

すると拓海が口を開く。

「ってかさ、だからなに？」

不機嫌な訳でもなく、ただ不思議で仕方が無いという感じで拓海は言った。

「え？」

「俺に、そんなこと言っただけで、どうしたいの？」

「だよ。ごめん。なんでもないよ。ただ言いたかっただけ。」

私は付き合いたいという願いをぐちゃぐちゃに潰して言った。

すると拓海は「そう」と言っただけで黙る。

スーパー気まずい。

どれくらい沈黙していたのだろう。

急に拓海が振り切ったように口を開いた。

「おい梨花！テメーマジふざけんじゃねえよ。」

## 片想いが終わった瞬間

「へっ!?!」

私は真面目な顔でそう言う拓海のことを凝視した。

「だからさあ　その　そこまで言っというてそれはないだろ。」

「え」

「俺の気持ちもて遊んでんじゃないよ　俺」

そういつて拓海はうつむいた。

拓海の色が赤い。

初めて見る表情に私の心臓は一層早く鼓動する。

そんな顔が私に向けてのものだったらしいのに。

私は言った。

「ごめんね。千秋がいるのに。私、それ知ってて告白なんかしちゃうって、ごめん。」

すると拓海は急いで顔をあげる。

「はっ?」

顔が真っ赤だ。

私はそんな顔見てられなくて、もう一度目をそらす。

そんなに千秋のことが好きなんだね。

でもね、ごめん。

私も多分同じくらい拓海のことを大好きだよ

好きな人の好きな人が私だったら良いのに。

なんと思っただことだろう。

すると拓海はこんなことを言ってくる。

「意味分かんない　千秋が、なに?」

私は「言いたくない」とつぶやいた。

「　よく分かんないけどさ、　でも、俺お前のこと好きだよ。」

一瞬時間が止まった。

私は大きく目を開いて拓海を見た。

「え？」

「だからあ、俺、梨花のことが好き。ただそれだけ。じゃ。」

そういつて拓海は教室を出ようとした。後ろ姿からでも、耳まで赤いのが分かる。

そんなあ。

信じられない。

これって、現実??

「ちよつと、待って！拓海！」

気づいたら私は拓海の腕を掴んでいた。

「ちよつ。お前！」

拓海は驚いた様子で私を見下した。

そついえば1年前よりも身長がかなり高くなつている。

2年のクラス発表の時よりもずつと。

私は拓海の胸くらの高さしかない。

可愛い男子から、大人の男になつた拓海に、ドキつとする。

「拓海！」

私は拓海に抱きついた。

片想いが終つた瞬間だつた。

## ラスト

しばらく心地よい沈黙が続いて、そして拓海は言った。

「梨花 俺の理性がそろそろヤバいから離れた方が良かったも。」

「ん？」

「いや、だからさ！」

そういつて拓海は私の頬を両手ではさんで少しかがんだ。

「えっ。なに？」

「黙れ。」

そして拓海は私の唇に自分の唇を重ねた。

ファーストキス。

にしては長かった。

拓海も私も離れようとしなかった。

呼吸をも忘れていた。

ただただ、温かい拓海の唇が嬉しかった。

「おい梨花。」

「ん？」

私と拓海はならんで窓から校庭を眺める。

「俺、意外とSだけど、それでもいい？」

「知らなかった。でも今は知ってる。ってかDSでしょ。」

「はっ！なんだと。」

「超意外。もつと純朴な少年だと思ってたのに。」

「なんか、ごめん。」

互いに顔は見えないで、校庭を見て話す2人。

照れくさくて、でも嬉しくて、私はテンションMAXだった。

「ああ〜もうっ！だいすきっ！」

私は拓海に抱きつく。

「　　！おい！いきなり？！　　ああ。」  
「ん？どうしたの？」

「　　なんでもない」  
顔を真つ赤にして言う拓海はものすごく可愛かった。  
どうしてこの男はこんなに可愛いのだろう。

こんなにも可愛い人が私のものだなんて私はどうしてこんなに幸せなのだろう。

「だいきいいいい」

私はぎゅうくとキツく締めた。

「苦しいからヤメろ　　！」

「ダメ。アノ時首しめたお返し。」

「あ、お前覚えてたの　　って下を見るな！」

「へ？」

拓海は私を振り払ってしゃがんで言う。

「　　俺　　エロイから、その、梨花にそんなに抱きつかれると、もう限界というか、こらえるのもう無理というか、だから、その　　」

拓海は顔を真つ赤にして言った。

「拓海？」

「梨花ごめん！」

拓海は私にいきおいよく抱きついてきて、キスをした。

舌をからめられて、教室にくちゃくちゃと音が響く。

そして拓海は言った。

「キスだけじゃ我慢できないな。」

拓海は可愛すぎる笑顔で私だけに微笑んだ。

そして私の首をかじる。

「いたっ」

「お前が俺のものだっという印。」

「　　は？　　もう　　いたいなあ。」

私はそう言いながらも拓海に言われた言葉が嬉しくて思わず顔が二

ヤけてしまっ。

ひりひりと痛い首も、拓海だったら許す。なんて思ってしまう。  
私Mだったりして？

「本当は襲いたいけど、でも俺は梨花を守るから。」  
私はその時はその言葉の意味がよく分からなくて、でも一応うなずいた。

「私も拓海のこと守るからね。」

私と拓海は本日3回目の、そして人生3回目のキスをした。

## ラスト（後書き）

この話は、実話にもとづくお話です。

私が経験した話です。

最後までよんでいただき、ありがとうございます。

拓海は、実際はこんなに格好よくないです。

本当はもっと不器用で女の子の扱いになれていない普通の中学3年生です。

でも難しいですね。

男子の気持ちなんて分かりません。

私は私とその都度思ったことを思い出しながらこの小説を書き上げました。

難しかったです。

日記を見てみたり、携帯のメールを見てみたり。

でも一番思ったことは、楽しかったということです。

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0165/>

---

片想いの切なさ

2011年1月25日03時03分発行